

# トピック内で見られる日本語学習者の聞き手行動の特徴

## —日本語母語話者のパターンからの逸脱に注目して—

野田加代(群馬大学大学院生)

### 1. はじめに

本発表は、日本語学習者(以下、学習者)と日本語母語話者(以下、母語話者)の雑談場面における学習者の聞き手行動を、トピック単位で一連の会話から考察するものである。水谷(1980)は、話し手と聞き手が共に話の流れを作る日本語の談話の形態を「共話」と命名した。黒崎(1995)によれば「共話」は話し手側の気配りだけでなく、積極的に共感の情を表そうとする聞き手の気配りがあるはじめて成り立つ、とある。また植野(2017:116)は「聞き手はあいづちを入れたり、相手の発話を繰り返したりしながら、話すことに参加する」としている。日本語会話では聞き手は、話し手の発話に応じた適切な聞き手行動をとることが想定されると言えるだろう。雑談の定義は筒井(2012:33)に従い「特定の達成すべき課題がない状況において、あるいは課題があってもそれを行っていない時間において、相手と共に時を過ごす活動として行う会話」とし、トピックの区切りは筒井(2012:39)の5つの「話題内容の質的な異なりを判断する基準」に従う。また分析には、聞き手が相手の語りに対して段階を踏まえながら共感を示す様子を、発話の連なりから検討した黒嶋(2013)の知見を援用する。

### 2. 先行研究

聞き手行動の研究は、学習者同士の会話から言語行動を分析した堀口(1997)や、中国人学習者に「聞き手ストラテジー」指導を行った柳田(2008)、聞き手行動と話題への参加の仕組みを日中母語話者で比較した楊(2015)など様々な研究がなされてきた。多くはあいづちの使用状況を種類や出現数などを会話から抜き出して分析するものである。会話の流れに沿った学習者の聞き手行動を母語話者と比較し、そこにどのような特徴や問題があるかを分析したものは管見の限りない。

勝田(2015)によると学習者の聞き手行動には中間言語的な性質があり、母語話者の規範から逸脱し、母語話者が違和感を覚えても「留意」すべき点が具体的に示しづらく「調整」もされにくいという。このことは学習者の聞き手行動を観察し、問題点を探るためには、あいづち、聞き返しなどを単体で取り出して分析するだけでは十分ではなく、相手とのやり取りの中から考察する必要があることを示唆している。接触場面での学習者の聞き手行動は、会話の参加者が聞き手、話し手どちらにもなり得る雑談会話で、会話の流れのなかで検討される必要があるだろう。

### 3. データと分析方法

本発表では母語話者3名とベトナム人学習者2名から2人1組で行った会話を録画、録音したものを資料として使用する。母語話者(知人同士)の組み合わせ1組、母語話者と学習者2組(いずれも初対面)、1組の収録は約45分、延べ135分、特にテーマを定めず自由に話してもらった。母語話者と学習者の情報は表(1)のとおりである。

表(1)母語話者と学習者の情報

母語話者	年齢	接触場面	学習者	年齢	日本語能力試験	日本滞在	職業/職種	接触場面
A	60代	ほとんど	D	30代	N2	5年	会社員/営業企画	職場のベトナム人同僚(1名)とは母語で、日本人とは日本語で会話する。
B	70代	ない	E	20代	N3	3年	会社員/システムエンジニア	
C	70代							

あいづちの機能はメイナード(1993:160)の分類を利用し、聞き手行動を、本発表データで出現した言語形式を元に、以下の表(2)のようにアからエの4つに分類した。

表(2)メイナード(1993)のあいづちの機能と本発表の聞き手行動の分類と言語形式

メイナード(1993)		本発表の聞き手行動の分類		本発表のデータで出現した言語形式
1	続けてというシグナル	ア	基本のあいづち	「はい」、「うん」、「ええ」
2	内容理解を示すあいづち	イ	受け止め	「あー」、「へー」、「はー」、「ふーん」、「ほー」 「おー」、相手発話のくり返し
3	話し手の判断を支持するあいづち			
4	相手の意見、考え方に賛成の意志を示す表現			
5	感情を強く出す表現	ウ	評価	「ほんと?」、「いいですね」
6	情報の追加、訂正、要求などをする表現	エ	語りへの関与	相手発話に関する質問

母語話者が話題を提供し、話し始めてから次のテーマに変わるまでの会話をトピックとして抜き出し、考察の対象とした。トピックの開始と終了に関しては楊(2015)の注(2)の方法に倣い、データの30%を母語話者1人の協力を得て一致率を求めた。一致率は90%で、一致しなかった箇所については協力者と協議を行い決定した。残りは発表者が決定した。

会話は BTSJ (2019 年改訂版) に基づき文字化し、発話の重なり、間合い、笑いの記号は西阪(2008)を参考にした。また大塚(2016)の表記に倣い、あいづちも独立した発話として扱う。また分析に際しては、会話当事者からのフォローアップインタビュー(以下、FUI)のほかに、母語話者 5 名(以下、第三者)に接触場面の分析個所の録画を見てもらい、そこで聞かれた感想も参考とした。

## 4. 母語話者、学習者の聞き手行動の例と分析

### 4.1 母語話者の例と分析

例(1)は母語話者AとBの会話でBの質問から始まり、Bが話し手となる約1分のトピックである<sup>1)</sup>。ここでは聞き手のAが2, 5, 6, 7, 13(数字は発話文番号, 以下同様)で基本のあいづち(以下, 基本)を5回, 8, 13で受け止めを2回, 10で評価と語りへの関与(以下, 関与)を1回ずつ, 14で受け止めと評価を1回ずつ, 16で関与を1回行っている。このトピックは17でBがAへの質問に答え、それを受けたAが18で孫のおやつの話に話題を向けることで終わる。

例(1) ABチョコレートパフェ	14 9 B [夢のようにおいしかったパフェ。
01 1 B ほんとな、何であんなに(.)なんかおいしかったチ、チョコ	15 10 A ほんど? 北海道? 【ウ】、【エ】
02 パフェとかある? [どっかで。	16 11-1 B 北海道のね、
03 2 A [うん。 【ア】	17 12 A あー。 【イ】
04 3 A (.)最近食べてないよね。	18 11-2 B 札幌でね、
05 4-1 B う:ん、私昔食べた、札幌かどっかに一おまに連れてって	19 13 A うん。 【ア】
06 もらって[食べた、	20 11-3 B 食べたパフェ、いまだに忘れられない。
07 5 A [うーん。 【ア】	21 14 A へー、よっぽどおいしかったんだね。 【イ】、【ウ】
08 4-2 B 何とかバーラーっていう有名なバーラー屋さんの、	22 15 B うん、まあ、子どもだったこともあるし。
09 6 A うん。 【ア】	23 16 A 何歳ぐらいの時の話なんでしょ?。 【エ】
10 4-3 B あの(.)hhh(.)何だっけ、パフェ、	24 17 B やっぱ小学校の高学年じゃないのかな。
11 7 A うん。 【ア】	27 18 A 一番さー、そういうのがおいしく感じる時かもしれない
12 4-4 B あれ、あれがね、いまだに忘れられないの。	28 なー、なんかね、昨日ね、あの一方のおやつ私いつも
13 8 A [へー。 【イ】	29 ほら#って、一番上の一孫がさー、今小学校5年生?

5, 6, 7で観察されるようにトピックの状況説明を聞くあいだ、Aは「うん」で相手の発話を促している。しかしBが4-4で、このトピックのクライマックス(甲田 2015)と考えられる「(あのパフェが)いまだに忘れられないの」を発した際は、それに呼応するように、8で「へー」というそれまでとは違う言語形式で相手の発話の終了を受けている。富樫(2005:26)によると「へえ」は「知らなかった情報をきちんと整理した上での納得した驚き」とある。ここではチョコレートパフェが、Bにとって何十年も忘れられない味として記憶されていることに対する、Aの率直な驚きがうかがえる。13で基本に戻るが、14で再度、受け止めと「よっぽどおいしかったんだね」という評価が出現する。この、基本のあいづちから受け止め、評価へと変化する聞き手行動は、黒嶋(2013)のいう段階を経た共感の示し方の一種だと考えられる。

### 4.2 学習者の例と分析

#### 4.2.1 学習者Dの例

例(2)は母語話者Cと学習者Dの会話である。Dの質問にCが答える形で海外旅行のトピックが始まる。Dは4, 6, 9, 11, 12, 15, 17, 18で基本を8回, 7で受け止めと評価を1回ずつ, 13で相手発話のくり返しによる受け止めを1回行っている。関与はない。このトピックは双方の笑いで終了し、Dの22の発話から新たなトピックが始まる。

例(2) CD海外旅行	09 7 D あhhh、いいです。 【イ】、【ウ】
01 1 C コロナが収まったらどっか行きたいんですけどねー。	10 8 D カナダ、す、いいですねー自然がねー。
02 2 D 先生(.)旅行は、国内と、あ海外はどちらー。	11 9 C はい。 【ア】
03 3 C あ、若い(.)もうちょっと何年か前はあちこち行きました、	12 10-1 C それから、そのあとはヨーロッパをあちこちまわって、
04 海外へ。	13 11 D はい。 【ア】
05 4 D あー、はい。 【イ】、【ア】	14 10-2 C で、ハワイが好きで3回か(.)なんか行って、
06 5-1 C ずいぶんと(.)一番最初は、	15 12 D はい。 【ア】
07 6 D はい。 【ア】	16 10-3 C あと(.)中国。
08 5-2 C カナダ。	17 13 D 中国。 【イ】

1) トランスクリプトは、ライン番号、発話文番号、発話者、発話内容の順に提示する。同時の発話は[で示す。ア、イ、ウ、エは聞き手行動の分類を表す。

18 14-1 C 中国の(.)九寨溝とか、	27 19 C (.)だけど(.)ベトナムは行ったことないh h h。
19 15 D はい。【ア】	28 20 D h h h h h h
20 14-2 C あの、なんていうのコウリュウとか、な、なんていうの、	29 21 C h h h h h h
21 あの、～眉間を抑えてうつむく～ <sup>2)</sup>	30 22 D んーせんせい、ベトナムーに、んい、あー行きたいー、
22 16 D (0.1)	31 なら、あーベトナムの中部、中部【おすすぬ。
23 14-3 C 石灰でできた(.)なんか、中国、台湾、	32 23 C [中部
24 17 D はい。【ア】	33 24 D 中部です。
25 14-5 C あの辺は行きましたね。	34 25 C はい。
26 18 D はい。【ア】	35 26 D はい。

基本の6, 11, 12, 15, 17はCの発話の間に挟まれ、母語話者の例にあった「うん」と同様、相手の発話を促すものとしては母語話者のものと形式と機能が一致している。それ自体に違和感はないが、Dは9, 18に見られるようにCが発話を終了させても「はい」というあいづちを打っている。14-5でCが明らかに発話を完了させたと思われる位置で、受け止めではなく、基本を用いている点は母語話者の例と明らかに違う。岡崎(1987)ではあいづちの高度化として、説明に対して「あー成程」、驚きの強調として「へえー」、同情、共感の多種化として「ひどいですねー」「よかったですねー」「そうですねー」などを高度な談話上の活動の一つとして指導項目に挙げている。これは初級から中級の「聞き手中心の談話指導」から上級者向けへと発展したという点で「高度化」ということだが、母語話者との雑談場面では学習段階に拠らず、受け止めや、驚きや共感を、自身の態度表明として伝えることは重要であろう。また三宅(1998)は「はい」にはスポーツ中継のアナウンサーによる解説者への続行要求として、相手対してさらなる情報を求めるような作用があるとしている。Cはそれに促されるようにカナダ、ハワイ、中国と訪れた場所を列挙しているが、第三者からはCが訪れた地名を列挙して自慢しているように聞こえる、との感想があった。

#### 4.2.2 学習者Eの例

例(3)は母語話者Aと学習者Eの会話である。このトピックの前に、Eは休日の過ごし方として、ジョギングとサッカーをするという内容の話をしている。それを受けてAが孫のサッカーの話始めた。トピックはAが31「そうですね、うーん」のあと、質問の形でEの休日の過ごし方に話題を戻したところで終了する。Eは2, 9, 12, 17, 18, 19, 20, 22, 24, 25, 26で基本を11回、3, 11, 14, 15で受け止めを4回、30で評価を1回行っている。関与は見られない。

例(3)AE孫のサッカー	21 ト、トナン?となんつたけな?トナミかな、なんか
01 1-1 A あのねーあたしねーあの、今一小学校一年生のね、	22 そういうところのね、
02 [男の子の孫がいるんですよ。=	23 14 E ふーん。【イ】
02 2 E はい。【ア】	24 13-2 A サッカー(.)教室?(.)なんですよ。
04 3 =あー。【イ】	25 15 E はい。【イ】
05 4-1 A でーその子がね、あの一、サッカーの、夕方、	26 16-1 A で、結構ね、ち、チーム?があつて、
06 5 E f f <sup>3)</sup>	27 17 E うん。【ア】
07 4-2 A サッカーの練習に行つて、で今日も夕方あるん	28 16-2 A サッカーチーム?大人の人のね、
08 [だつて言つてましたけど一、	29 18 E はい。【ア】
09 6 E [んー。	30 16-3 A あの一で、その人たちが夕方こんんに子供に教えてくれる
10 4-3 A そういうところでね、あの一(.)きつと(.)若いお兄さん?	31 みたいな、
11 7 E h h h h	32 19 E はいh h h h。【ア】
12 4-4 A に、教えてもらつてるんだと思つる=	33 16-4 A そんなことを聞いて、
13 8 E [h h h h	34 20 E はい。【ア】
14 4-5 A =ですよ。	35 21-1 A で、あの一みんな若いお兄さんだから、
15 9 E はい。【ア】	36 22 E はい。【ア】
16 10-1 A で、けっこうねえ、あの外国の人もあるんだよ一つて、	37 21-2 A あの一元気よくて?楽しいんだ一つてh h h h、
17 11 E ふーん。【イ】	38 23 E h h h h
18 10-2 A 言つてたから。	39 23-3 A 僕下手だけど、
19 12 E はい。【ア】	40 24 E はい。【ア】
20 13-1 A あ、あの一孫が行つてるの、前橋の、あそこなに、何叫か	41 23-4 A 下手だけど楽しいんだつてゆつてh h h、

2) 首から上で行われた目立つ身体の動きは、～で挟む。

3) ため息のような鼻息で、笑い(h)の要素はない。

42 25 E はい。 【ア】	48 29 A うーん、なるほどね、でも体動かすのっていいですね。
43 23-5 A お世話になってるんですけど。	49 30 E はい、健康の、健康のためですね。 【ウ】
44 26 E はい。 【ア】	50 31 A そうですね、うーん、じゃあ土曜日は(.)あの一
45 27 A えー、もしかしらそこかなと思ったんですけどちょっと	51 走ってhhh?。
46 違うところかな。	52 32 E ~大きくくうなずく~
47 28 E そうです、たぶんちょっと。	53 33 A 日曜日は(.)サッカーして?。

Eの2, 17, 18, 20, 22, 24, 25の「はい」はAの発話の途中で打たれていることから、母語話者の例にあった「うん」と同様、相手の発話を促すものと考えられる。一方、9, 12, 26の「はい」はAが発話を終えたあとに出現する。特に26は、Aが23-5でトピックに関する大方の情報を出したあとに打たれた「はい」である。ここはなんらかの受け止めが期待される場所であろう。またAの10-1について、AはFUIで外国人の中にはベトナム人もいるかもしれない、知り合いがいるかもしれない、という想像があったと話していた。それをEは11で「ふーん」と受け止めている。AはここでEから大きな反応がなかったことが残念だったと述べている。「ふーん」は富樫(2001)では情報を得、それを自身のデータベースに格納したことを示す談話標識ではあるが、「へえ」に比べると興味を示す度合は低いとされている。例(1)で「へー」が用いられている箇所と比較しても「ふーん」の物足りなさは明らかであろう。第三者からは、A一人が一生懸命しゃべっているが、Eの理解の程度はわかりづらいとこのこと感想があった。

## 5. まとめと今後の課題

学習者のデータに共通してみられる、母語話者のパターンからの逸脱は以下の2点だと考えられる。

- ① 基本のあいづちに用いられる言語形式が、受け止めの位置でも用いられている点
- ② 受け止めへと変化しても、その変化の度合いが小さく、話し手のトピックのクライマックスにそぐわない点

学習者は必ずしも同じあいづちだけを繰り返しているわけではないが、母語話者に比べて基本が多用され、母語話者がそれに押されて次の発話に進む様子がうかがわれる。また受け止めの「あー」や「ふーん」が母語話者の先行発話に対するものとしては平板で、基本との差があまり見られない。学習者のFUIでは母語話者の日本語は聞きやすく、話し方も優しくたと述べていたが、相手発話の理解表明だけでは、植野(2017)のいう「共話型の会話を形作る聞き手行動」は実現できない。母語話者の発話内容に応じて、基本から受け止め、次に評価へと適切な言語形式で、会話に参加することが必要である。さらにデータを観察し問題点を具体化したい。

### 参考文献

- 堀口純子 (1997). 日本語教育と会話分析 くろしお出版
- 勝田順子 (2015). マレーシア人留学生と友人日本人大学生の接触場面における「規範」の違い—「あいづち」の「規範」からの逸脱— 社会言語科学, 18(1), 60-74.
- 甲田直美 (2015). 語りの達成における思考・発話の提示 社会言語科学, 17(2), 24-39.
- 黒崎良昭 (1995). 日本語のコミュニケーション—「共話」について— 園田学園女子大学論文集, 30(1), 45-60.
- 黒嶋智美 (2013). 段階を経る共感 西阪 仰・早野 薫・須永 将史・黒嶋 智美・岩田 夏穂(著) 共感の技法 勁草書房 pp. 157-171.
- 三宅和子 (1998). 談話における「はい」の機能—応答詞としての「はい」からリズムとりの「はい」まで— 東洋大学短期大学紀要, 30, 13-25.
- 水谷信子 (1980). 外国語の修得とコミュニケーション 言語生活, 344, 28-36.
- 泉子・K・メイナード (1993). 会話分析 くろしお出版
- 西阪仰 (2008). トランスクリプションのための記号 v. 1.2 2008年1月 (確認:2022-1-10)
- 岡崎敏雄 (1987). 談話の指導—初～中級を中心—to 日本語教育, 62, 165-178.
- 大塚容子 (2016). 初対面の二人会話におけるあいづち行動—非言語行動も含めて— 岐阜聖徳学園大学紀要. 外国語学部編, 55, 71-83.
- 富樫純一 (2001). 情報の獲得を示す談話標識について 筑波日本語研究, 6, 19-41.
- 富樫純一 (2005). 「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論 言語, 34(11), 22-29.
- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析 くろしお出版
- 植野貴志子 (2017). 日本人の聞き手行動—「融会的談話」を事例として— 日本語学, 36(4), 116-126.
- 柳田直美 (2008). 中国人学習者に対する「聞き手ストラテジー」指導の効果—授業活動と日本語母語話者の対中国人学習者評価から— 筑波大学留学生センター日本語教育論集, 23, 15-30.
- 楊虹 (2015). 初対面会話における話題上の聞き手行動の中日比較 日本語教育, 162, 66-81.